

四旬節第四主日 2020.3.22

シロアムの盲人、サマリアの女

ヨハネ福音書9章1-41節

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。わたしは、世にいる間、世の光である。」こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。

「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」ファリサイ派の人々の中には、

「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということ信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」両親は答えて言った。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの方の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。我々は、神がモーセに

語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

## 説教

ヨハネ9章、まるごとの長い朗読でしたが、癒された盲人の目線から短くまとめるとこうなります。

**主はわたしの目に土を塗られ、わたしは行って、洗い、見て、神を信じた。**（本日の拝領唱から）

イエスは神の働き（聖霊）によって盲人をいやした、具体的には見えなかつ

た人を見える人にしました。

先週の福音ヨハネ4章ではサマリアの女をサマリアの人びとは信じました。今日の福音ヨハネ9章ではシロアムの盲人をエルサレムの人びとは信じず、追放しました。サマリアの女とシロアムの盲人、女と男、彼女と彼をとおして人々がイエスを信じるのか、信じないのかの対比となっています。モノとしては信じる信じないは「命の水」4章「つば入りドロ団子」9章となっていて、清らかそうな水に対して、ドロ団子では信じずらいかなあ、ちょっとエルサレム側の分が悪いような気がします。しかし、あえてイエスは、物事のうわべだけを見るのではなく、その底にある「神の働き」を見ることができなのか、できないのかを人々に特にファリサイ派の人たちに問いかけています。そしてイエスはエルサレムの人々、とくにファリサイ派の人たちにこのようにコメントしました。

**見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。**ヨハネ9:41

ファリサイ派の人たちは罪びとだとイエスはハッキリ告げました。彼らがみているのはイエスの働きそのものではなく「安息日に働いてはならない」という律法解釈だからです。神の働き、聖霊の働きを見ることなく、文字（律法）によって事実を判断し裁こうとしているからです。神の視点から見れば、4章のサマリアの人々には罪はなく、9章のエルサレムの人々には罪があるということになります。

パウロは簡潔にこう言っています。

**文字は殺しますが、霊は生かします。**ニコリ3:6

パウロは自分自身の苦い経験をもとに律法を判断の基準にしているとダメで、イエスの行い、霊の働きを判断基準にすると生きるのだとっています。イエスが人の子であり、メシアであるのは、目に見えるモノの背後に神の働きがあることを世界ではじめて気づいた方だからです。イエスはその気づきを「神の国は近づいた」と言い表し宣教を開始しました。

イエスの気づき=わたしたちを生かしている神の働きに気づき、見えないものではなく、見えるものへと変えられていきますように。